

# 社 会 科

金田 哲也

水橋 長之

坂井 宏行

研究協力者 加藤 隆弘(金沢大学)

## 1 ESDを進めるにあたって

平成20年1月17日の中教審答申では、社会科、地理歴史科、公民科の基本方針として、「持続可能な社会の実現を目指すなど、公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力を育成することを重視する」と明記された。今日的課題としての防災やエネルギー問題が注目されている世相を反映し、社会参画の必要性が一層重要視されてきた結果であるといえる。このことはまさしく学習指導要領における社会科の目標である「国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」に直結するものであり、公民的資質の基礎に基づいて目指すべき国家・社会の在り方こそが、この答申に記された持続可能な社会であるといえる。社会科の目標を将来的な持続可能な社会の形成者の育成とみるならば、国立教育政策研究所が定めたESDの視点に立った学習指導の目標「持続可能な社会づくりに関する課題を見いだし、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付ける」と合致する部分が多く、目指すべき方向性は概ね一致しているといえる。また、一昨年度の本校研究紀要にまとめたようにESDの視点に立った学習指導で重視する7つの能力・態度についても、現行の学習指導要領及び解説から読み取ることができ、社会科の学習を通して身に付けさせる能力・態度と概ね一致している。以上のことから、これまでの社会科の学習指導の中に、ESDに関連する部分を明確に位置付けていくことで、ESDの視点を重視した学習指導のねらいを達成することができると考えられる。

ESDの研究は3年目に入るが、昨年度までの研究では、まずは、教材の「つながり」を意識し、複数の教科でESDに関する共通した学習内容を扱い、問題解決的な授業の実践を積み重ねてきた。さらに、能力・態度の「つながり」として、教科等の思考力・判断力・表現力等とこれまでの研究との関連について探求を進めてきた。本校社会科では平成24、25年度の2か年間にわたり、国立教育政策研究所の教育課程研究指定校事業の指定を受け、「多面的・多角的に考察する力を育む指導と評価」を主題に、思考力・判断力・表現力等を高める指導と評価について研究を行った（『中等教育資料』平成26年6月号 No.937 参照）。こうした実績を踏まえ、本校が研究の中心に据えるESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度のなかでも「代替案の思考力」と「多面的、総合的に考える力」とを教科として特に重視することとしてきた。これらは教科の学習を通して生徒に身に付けさせるべき思考力・判断力・表現力等との関係が深く、従来の研究内容とのつながりも強いのである。今年度は、この2つの能力のうち、「多面的、総合的に考える力」を教科の学習を通していかに生徒に身に付けさせていくかに焦点を絞った。本研究では従来の思考力・判断力・表現力等を育成するための指導の工夫が、ESDに関する能力の育成にどのようにつながるかを明らかにしていきたい。

## 2 能力・態度の育成にあたって

### (1) 社会科の授業における能力・態度の育成について

社会科では、ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度のなかでも、特に「多面的、総合的に考える力」の能力を重視することにした。この能力は国立教育政策研究所によると以下のようによまとめられている。

#### ○多面的、総合的に考える力

人・もの・こと・社会・自然などのつながり・かかわり・ひろがり（システム）を理解し、それらを多面的、総合的に考える力

一方、教科のなかで生徒に身に付けさせたい能力であるが、前述の中教審答申の中で、改善の基本方針として「社会的事象に関心をもって多面的・多角的に考察し、公正に判断する能力と態度を養い、社会的な見方や考え方を成長させることを一層重視する方向で改善を図る」とある。これは現行学習指導要領の根幹をなす考え方であり、ここで触れられている能力や態度の育成こそが社会科の目指すべきところであると考ええる。

以上のことから、中教審答申にある社会科で目指す多面的・多角的に考察する力の育成は、ESDで重視する能力「多面的、総合的に考える力」に深く関わっており、社会科の学習を通して育成するのに適していると考え、これを中心的に扱うことにした。

また、社会科では学習指導要領の解説にもあるように、社会的事象が様々な面を持っていること（多面的）、そうした社会的事象を様々な角度から考察し理解すること（多角的）を相互に関連付けることで教科の目標とする能力や態度の育成を図っている。ESDでは様々な面のつながりの理解を重視しているが、より総合的に考察するには社会科でいう「多角的」な事象の捉え方も重要である。

この力の育成のためには、社会的事象の側面が複数あり、かつそれを捉える立場が複数ある教材を用いながら、生徒に思考させるための適切な課題設定を授業内で行っていくことが必要であると考ええる。

### (2) 深い学びの過程について

本校社会科では将来を見据えた社会の形成者たるに必要な力を「社会の一員として自分の意見を持つために必要な力」とし、多面的・多角的に社会的事象を捉え、根拠に基づいて論理的に考察する力の育成について研究を進めてきた。従来の研究の中で生徒に身に付けさせようとしてきた「多面的・多角的に考察する力」は、論点整理の資質・能力の三要素における「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）」に関わり、これまでの研究成果を活かすことでこうした資質・能力の育成が可能であると考ええる。

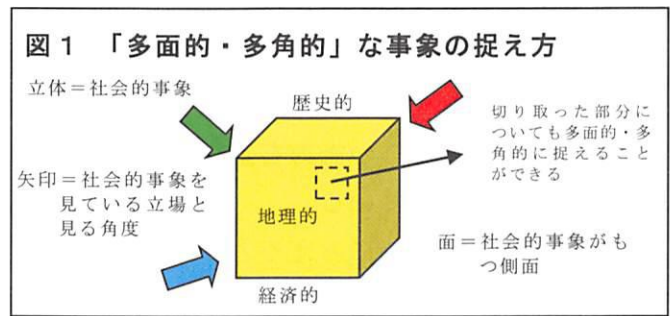
また、授業実践においては、問題発見・解決の過程を重視し、「深い学びの過程」の視点を意識して、以下の①～③に留意しながら取り組んだ。

#### ①多面的・多角的に考察する力

社会科の思考力において根幹となるものであり、「多面的、総合的に考える力」につながる。本校では「多面的・多角的」という捉え方を「多面的」「多角的」の二つに分け、地理的分野は「多面的」、歴史的分野は「多角的」、公民的分野は「多面的・多角的」にそれぞれ捉えやすいと考えた。そして、多面的な考察→多角的な考察→多面的・多角的な考察→…というスパイラル構造を意識

することで、1・2年時で「多面的・多角的」に考察する基本的な力が身に付き、それを土台に3年時の公民的分野では「多面的・多角的」により深い考察が促されると考えた。

また、こうした授業実践のための方策として、授業で扱うべき社会的事象の捉え方をイメージ図にまとめ（図1）、授業計画に活用した。これにより、よりの確に主題となる社会的事象を捉えることができ、多面的・多角的な考察の場面を設定しやすくなると考えた。



こうした多面的・多角的な考え方が生徒の日常生活に生かされていることも研究の成果として確認しており、ESDが目指すべき持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観の育成につながっていくと考えた。

## ② 形成的評価

上記①の能力の定着を図るには、適切な形成的評価を継続して行うことが重要である。そこで、生徒の発言内容やワークシート、レポートの記述内容等を評価対象として、それらの可視化、共有を図ることを考えた。

具体的にはツールミンモデルの利用や板書の工夫、教材提示装置の利用があげられる。思考を可視化することで生徒の自己評価や相互評価が容易になり、評価の妥当性を高めることができる。その際、多面的・多角的に考察しているか、根拠を明らかにしているか、根拠は妥当かといった点について評価するように促した。

また、レポートについては、相互評価を行うことで、一つの事象について、さまざまな立場・視点で捉えることができるよう配慮した。

さらに、教師が評価したことを適時生徒にフィードバックすることで、生徒の学習意欲や自信につなげ、こうした評価を繰り返すことで、深い学びの過程が実現できると考えた。

## ③ 能力・態度の「つながり」について

昨年度に引き続き、ESDに関連した単元・題材を扱うにあたり、社会科における思考力・判断力・表現力等を生徒に身に付けさせるために、問題解決的な学習を意識した。その際、「多面的、総合的に考える力」の育成が図られるよう、立場を明確にして思考できる課題を意図的に設定した。また、授業を構築する上で以下の点について意識した。

- ・社会的事象が持つ複数の側面の中から、授業で取り上げるものは何か（「多面的」に捉える）。
- ・考察させるときの立場は何か（「多角的」に捉える）。
- ・考察に必要な資料は何か（根拠を明らかにする）。

特に、考察するときの立場を明確にする場面設定を意識し、取り組んだ。

## (3) 教材の「つながり」について

昨年度作成したカリキュラムマップは、教科としてESDに関連する単元・題材をまとめたものである。それには環境やエネルギー、防災等多くの分野に社会科の単元・題材が含まれている。特に学習指導要領の中に「持続可能な社会」という言葉が明確に打ち出されている地理的分野や公民

的分野の単元・題材がカリキュラムマップ上に多くみられた。社会科はE S Dの多くの分野で他教科との教材の「つながり」を図りやすい。

社会科ではこうした特性を活かして、積極的に他教科へ情報を発信し、つながりのある授業をさらに構築していく役割があると考え、進めてきた。

また、前述したように、カリキュラムマップ上の各ユニットにおいて、他教科との教材の「つながり」を深めていくためにも、問題解決的な学習を構築するにあたって、より立場を意識した授業となるよう取り組んだ。このことが、教材の「つながり」において、社会科からのアプローチとして「多面的・総合的に考える力」の育成、すなわち能力・態度の「つながり」に関わっていくことになると思う。

### 3 成果と課題

#### (1) 成果

多面的、総合的に考える力の育成にあたっては、多面的・多角的に考察する力を生徒に身につけさせることを重視してきた。

生徒アンケートでは、「多面的・多角的なものごとを考えられるようになったと思う」という生徒の割合は、2年・3年ともに昨年度に比べて10ポイントあまりの伸びが見られ、どの学年も6割前後の生徒が考えられるようになったと実感しており、生徒自身が多面的・多角的に考察する力がついてきたと意識している。このことから、昨年度に比べ、さらに多面的、総合的に考える力が身に付いてきたと考えられる。

また、「何が根拠か見分けがついていると思う」という生徒の割合も昨年度に比べ、10ポイントあまりの伸びが見られており、「何が根拠か見分けがだいたいついていると思う」という生徒の割合を加えると多くの生徒が肯定的にとらえていると考えられる。特に3年生においては、否定的な意見は0ポイントとなっており、このことは、資料から読みとった情報を論理的に用いる技能が備わってきていると考える。

こうしたことから、「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）」の育成につながったと考える。

#### (2) 課題

今年度は、多面的、総合的に考える力の育成について、さまざまな面や立場を意識した課題設定に取り組んできた。その結果、多様な考えによる課題解決を意識し、一人一人がさまざまな視点からアプローチできるように実践を行ってきた。

今後さらに、多面的、総合的に考える力の育成を考えるにあたり、「根拠を明らかにし、立場を変えて考えることで納得する」場面を設定し、一人一人が自分自身の中でも考えを深めながら取り組むことができることを目指したい。そのためにも次年度に向けては、1つの結論ありきではなく、多様な結論を想定した課題設定にも取り組んでいきたいと考えている。

## H 2 8 社会科学学習アンケート集計結果

アンケート対象 1年 159名 2年 156名 3年 153名

※単位は「%」, 矢印は昨年度からの変化を示す

設問1 「多面的・多角的にものごを考えること」について、あなたにあてはまる文の記号に○をつけてください。

- ア 多面的・多角的にものごを考えられるようになったと思う。
- イ 多面的にはものごとを考えられるようになったと思う。
- ウ 多角的にはものごとを考えられるようになったと思う。
- エ どちらともできていないと思う。

	ア	イ	ウ	エ
1年	32	23	38	7
2年	46→58	25→19	25→22	4→1
3年	54→64	10→11	34→24	3→1

設問2 多面的・多角的にものごを考えるための「根拠」について、あなたにあてはまる文の記号に○をつけてください。

- ア 何が根拠かの見分けがついていると思う。
- イ 何が根拠かの見分けはだいたいついていてと思う。
- ウ 何が根拠か見分けがつけられていないと思う。

	ア	イ	ウ
1年	9	85	6
2年	21→31	76→66	3→3
3年	40→55	58→45	2→0

設問3 あなたが、「多面的・多角的にものごを考えること」ができたと思う学習内容は、どの分野のどんな社会的現象ですか。また、どのように考えることができ、その結果どんなことが学べましたか、具体的に説明してください。

設問4 あなたは、社会科の学習内容のなかで、他教科の学習内容が深く関連していると意識したことはありますか。あてはまる記号に○をつけてください。また、「意識したことがある」という人は、どの教科の何という学習内容で活用したかも具体的に書いてください。

- ア 意識したことがある。
- イ 意識したことがない。

	ア	イ
1年	53	47
2年	69→61	31→39
3年	65→78	35→24

設問5 設問4で「意識したことがある」と答えた人は、その学習を通してどのようなことを学んだり、感じたりしたか書いてください。

設問6 ひとつの題材を複数の教科の授業を通して学習する機会がありました。このことについて、あてはまる記号に○をつけてください。

① 「ひとつの題材を複数の教科の授業を通して学ぶ機会」を通して、新たな気づきや学びがありましたか。

- ア 「新たな気づきや学び」が、たくさんあった。
- イ 「新たな気づきや学び」が、少しはあった。
- ウ 「新たな気づきや学び」は、ほとんどなかった。
- エ 「新たな気づきや学び」は、なかった。

	ア	イ	ウ	エ
1年	33	61	4	2
2年	41→49	58→49	1→2	0→0
3年	48→53	49→43	3→5	1→0

② 「ひとつの題材を複数の教科の授業を通して学ぶ機会」についてどのように感じていますか。

- ア ひとつの教科で学ぶより興味・関心が、とても高まる。
- イ ひとつの教科で学ぶより興味・関心が、ある程度は高まる。
- ウ ひとつの教科で学ぶより興味・関心は、あまり高まらない。
- エ ひとつの教科で学ぶより興味・関心は、高まらない。

	ア	イ	ウ	エ
1年	46	47	5	1
2年	52→49	43→47	4→3	1→1
3年	57→56	39→40	4→3	1→1

③ 「ひとつの題材を複数の教科の授業を通して学ぶ機会」についてどのように感じていますか。

- ア このような機会が、たくさんあったらよいと思う。
- イ このような機会が、時々あったらよいと思う。
- ウ このような機会は、ほとんどなくてよいと思う。
- エ このような機会は、なくてよいと思う。

	ア	イ	ウ	エ
1年	54	42	4	1
2年	56→49	40→49	4→3	0→0
3年	57→50	39→46	4→2	1→1

設問7 授業(全教科)を通して、「持続可能な社会をつくること」について、どのように感じていますか。あてはまる記号に○をつけてください。

- ア 持続可能な社会をつくる大切さを、ある程度理解することができ、何らかの行動に移すことができた。
- イ 持続可能な社会をつくる大切さを、ある程度理解することができた。
- ウ 持続可能な社会をつくる大切さを、あまり理解することができなかった。
- エ 持続可能な社会をつくる大切さを、理解することができなかった。

	ア	イ	ウ	エ
1年	10	83	6	1
2年	24→21	75→76	1→3	0→0
3年	22→26	77→72	1→2	1→0

## 1 題材名 寒暖の差が激しい土地に暮らす人々

## 2 ねらい

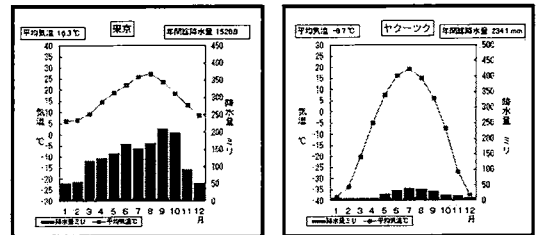
自然的条件に適応した暮らしとはどのような生活なのかを、様々な資料から多面的にとらえることができる。

## 3 学習活動

## (1) 雨温図の確認

冷帯について、雨温図から日本の気候との違いを確認する。

東京とヤクーツクとの比較で、気温の年較差が大きいこと、冬は-20度まで下がることをグラフから読みとらせる。



## (2) 課題「氷点下の環境で生活する人々の工夫を探ろう」

映像により、冷帯の特徴(タイガの広がり、永久凍土)について知る。

映像(オイミヤコンの生活、ダーチャの暮らし)や資料写真から、自然環境との関わりの中で、人々の生活の工夫について考察する。

- ・凍らない川の水を利用
- ・夏に野菜を栽培する
- ・夏野菜を塩漬けにし、保存食とする
- ・魚を捕っている
- ・木造住宅
- ・窓は二重窓
- ・高床になった住宅

## (3) 自然環境の変化

森林伐採などの開発によって、タイガの森にアラス(湖)が広がるなど、冷帯においても地球環境問題が見られることを知る。

また、こうした環境変化の中、古い木造住宅が傾くなど、人々の日常生活に自然環境が大きく関わっていることを考える。

## 4 ESDとの関連

## (1) 構成概念

I 多様性・・・世界には、様々な自然環境、文化がみられること。

III 有限性・・・人々の生活においては、限りある資源を使っていること。

## (2) 能力・態度

## ③多面的、総合的に考える力

オ いろいろな側面やいろいろな人の立場からものごとをとらえることができる。

## 【教科等の力】

寒暖の差が激しい土地における生活の工夫や、自分たちとの違いについて考える力。

## (3) 教材の「つながり」

## ①ESD関連分野 国際理解

## ②教科 英語, 家庭

## ③題材 「国際フードフェスティバル」(英語1年), 「食文化」(家庭1~3年)

1 題材名 宗教のおこりと三大宗教
2 ねらい 三大宗教の内容などから、古代の人々が抱いていた思いや悩みなどに迫ることができる。
<p>3 学習活動</p> <p>(1) 地理的分野での学習内容の確認 世界の宗教には仏教、キリスト教、イスラム教のほかに、ヒンドゥー教などがあり、それぞれが地域に根ざし、地域の生活に深く関連しているものも多い。</p> <p>(2) 仏教、キリスト教、イスラム教の三大宗教について知る(習得の部分) それぞれの宗教の起こった地域、開祖、経典、教義などについて、地理的分野の学習などで得た、生徒の持っている知識を活かしながら整理していく。特に教義に関して、「どのような理由でこういった教義が存在するのか」といった視点を重視することで、次の活用や探求の部分につなげる。</p> <p>(3) 古代の人々はどのような思い、悩み、考えを持って、これらの宗教を開き、そして信仰していったのかについて考察し、話し合う。(活用、探求の部分) 活用 … 知識をもとに、古代の人々の思いに迫ろうとする部分 探求 … 古代の人々の思いは、現代の人々にも共通するものではないかという気づきから、宗教に対する寛容の姿勢や他者理解、国際理解につなげて考える</p> <p>【生徒の意見(抜粋)】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・古くから差別や不平等があり、それをいやだと思ふ気持ちがあったのではないか。</li> <li>・困ったときの神頼みじゃないけれど、そういった思いは古代の人々も持っていたのだとわかった。</li> <li>・戦いや、農耕の失敗などからくる食糧不足などといった不安な気持ちを、宗教を信仰することによってやわらげようとしたのではないか。</li> <li>・みんなで助け合って生きていくために、宗教も重要な役割を果たしていたのではないか。</li> </ul>
<p>4 ESDとの関連</p> <p>(1) 構成概念 I 多様性…日本や世界のそれぞれの文化の中に多様な考え方があることを知る。</p> <p>(2) 能力・態度 ③多面的・総合的に考える力 オ いろいろな側面やいろいろな人の立場からものごとをとらえることができる。</p> <p>【教科等の力】 世界の宗教のおこりについて多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現する力。</p> <p>(3) 教材の「つながり」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① ESD関連分野 国際理解</li> <li>② 教科等 英語(1年)</li> <li>③ 題材 「国際フードフェスティバル」(食文化)</li> </ul>

## 1 題材名 地球環境問題

## 2 ねらい

地球環境問題には様々な種類があり、それらは相互に関連し合っていることを、多面的・多角的にとらえ、その解決には国際的な協力と個人の取り組みが重要であることを理解する。

## 3 学習活動

## (1) ヨーロッパからみた環境問題

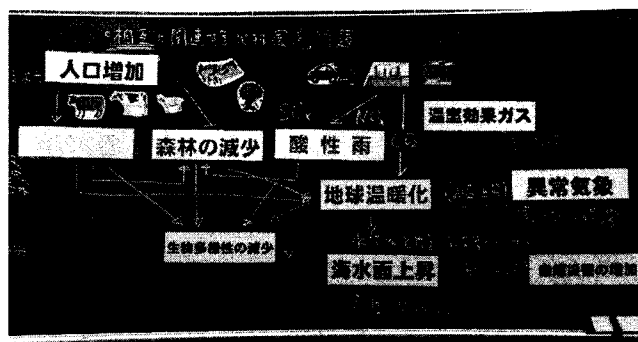
いち早く近代工業が発展したヨーロッパにおいて、古くから環境問題が発生したことを確認する。

小国が多いヨーロッパでは、他国と協力した取り組みが必要であったことを確認する。

## (2) 課題「地球環境問題について考えよう」

さまざまな地球環境問題について、どのような事象が見られるのか、その原因と結果をイメージマップで表現する。

「地球温暖化」からつなげていく。



## (3) 地球環境問題への取り組み

国際的な取り組みを知る。

- ・京都議定書
- ・国連気候変動枠組み条約 (COP21)

環境先進国ドイツの取り組みを知る。

- ・「次世代のための自然を守る責任」
- ・ペロタクシー
- ・デポジット制度

自分たちの身近な日常生活における取り組みを考える。

- ・5R (リデュース, リユース, リサイクル, リフューズ, リペア)
- ・マイバッグ
- ・省エネ
- ・公共交通機関の利用

## (4) まとめ

地球環境問題について、「相互」「国際」「個人」をキーワードとしてまとめる。

## 4 ESDとの関連

## (1) 構成概念

Ⅱ 相互性・・・地球環境問題は、相互に関わり合った問題であり、解決に向けては、個人の取り組みから、国際的な取り組みに至るまで、関わりを持った活動が大切であること。

## (2) 能力・態度

## ③ 多面的・総合的に考える力

オ いろいろな側面やいろいろな人の立場からものごとをとらえることができる。

## 【教科等の力】

地球温暖化を中心として、さまざまな地球環境問題について、その原因と関連性を多面的・多角的に考察する力

## (3) 教材の「つながり」

- ① ESD関連分野 環境
- ② 教科 全教科



## 1 題材名 開発の進行とその影響（南アメリカ州）

## 2 ねらい

- ・アマゾンの森林伐採の理由を考察することで、南アメリカ州の経済的発展の現状を知り、森林伐採に対する多様な考え方を理解する。また、今後の開発の展望について考えることができる。

## 3 学習活動

## (1) 世界の森林伐採の現状について理解させる

世界で起きている森林伐採について、伐採された森林の分布や面積といった統計資料から世界の現状について理解させた。生徒は植物の光合成について理科で学習しており、こうした既習事項から二酸化炭素の増加等の問題点について考えさせた。生徒からは森林伐採について、日本の中学生として「やめて欲しい」「自然を守るべき」といった意見が多くあがった。また、衛星写真の変化を追うことで、アマゾン開発の進展について確認し、その規模が大変大きく、社会問題に発展しうるものであることを理解させた。

## (2) 問題解決場面

森林伐採の結果、道路や大豆畑が造成されていったことを衛星写真から確認した上で「なぜアマゾンでは開発による森林伐採が続いているのだろうか」という課題を設定した。ここではアマゾン周辺の交通網や農産物・鉱産資源、大豆の需給動向や価格の変化といった資料に基づいて考察させた。その際、ツールミンモデルを用いて根拠となる事実と、それに対する解釈を分けるよう指導し、論理的な考察を促した。また、個人での考察の後、グループで話し合う時間を設けて生徒同士の相互評価を行わせ、考察の改善を図った。

考察結果から、南アメリカ州では森林伐採による問題を抱えながらもアマゾンでの人々の暮らしの向上や経済的発展のために開発が続いているという現状を確認した。アマゾンの森林伐採について、日本人と現地の人々との2つの視点から多角的に捉えることで、森林伐採は環境を破壊する面ばかりだけではなく、現地では経済発展の一助となっている事実を理解させた。

## 4 ESDとの関連

## (1) 構成概念

I 多様性…世界の地域の経済的・社会的背景はそれぞれ異なっており、そのため環境問題に対する考え方も多様であること

III 有限性…森林資源には限りがあり、伐採が進むことでさまざまな問題が生じること

## (2) 能力・態度

## ③多面的・総合的に考える力

オ いろいろな側面やいろいろな人の立場からものごとをとらえることができる。

## 【教科等の力】

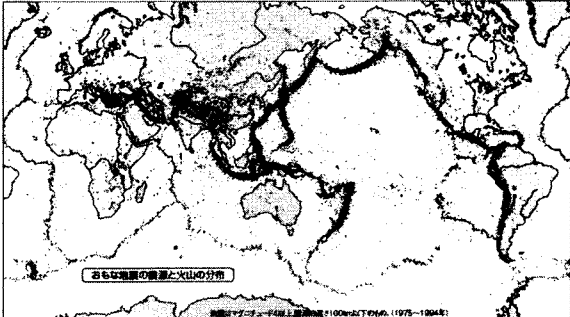
経済発展か自然環境保護かのバランスについて、根拠に基づいて考え、説明する力。

## (3) 教材の「つながり」

①ESD関連分野 環境

②教科 理科，技術

③題材 「光合成」（理科1年），「社会から求められている本立てをつくろう」（技術1年）

1 題材名 世界の地形
2 ねらい 日本の自然環境・地形の特色を世界の地形からの視点でとらえ、活発な火山活動や地震が、防災や観光など日常生活にさまざまな影響を及ぼしていることを理解する。
<p>3 学習活動</p> <p>(1) 学習課題の提示 「世界から見た日本の地形の特色をとらえよう」 世界地図で、主な火山の分布を確認する。 さらに、主な地震の震源を重ね合わせる。 世界には、活動的な地形が見られる中、日本列島が活動的な帯状の環太平洋造山帯に属していることを確認する。</p>  <p>(2) 造山帯と人々の生活 造山帯に属している地域の特色から人々の生活を考察する。 火山の活動や地震など自然災害が多く見られることで、人々の生活とどのように関わっているのか、防災岳でなく、観光資源の活用という積極的関わりについて考えさせた。 その際、世界各地との比較をさせ、造山帯という世界的な地形から考えさせた。</p> <p>防災 ……自然災害に対する備え 観光資源の活用……美しい風景のスイスアルプス、温泉保養地のニュージーランドなど 日本の観光地、温泉保養地 地熱の活用 ……各地の地熱発電所</p> <p>(3) まとめ 世界から見た日本の地形について、「火山」「地震」「防災」「観光」をキーワードとしてまとめる。</p>
<p>4 ESDとの関連</p> <p>(1) 構成概念 Ⅱ相互性……人々の日常生活は、社会的条件で相互に関わり合っているだけでなく、自然環境と大きく関わっており、より広い視点でとらえることが大切であること。</p> <p>(2) 能力・態度 ③多面的・総合的に考える力 オ いろいろな側面やいろいろな人の立場からものごとをとらえることができる。</p> <p>【教科等の力】 日本の自然環境について、世界各地との比較の視点から考える力。</p> <p>(3) 教材の「つながり」 ①ESD関連分野 環境 ②教科 理科 ③題材 「活着している地球」</p>

1 題材名 世界の資源と日本
2 ねらい ・将来の日本の理想的な電力構成について考察することで、エネルギー資源をめぐる日本の現状や発電方法について理解する。
3 学習活動 (1) エネルギー資源に関する日本の現状と発電方法の違いについて理解する 前時において、日本では資源がほとんど産出されないため、資源確保のためにどのような努力が必要かについて学習した。本時では前時の復習から、資源の輸入に依存しなければならない一方で、大量の電力を消費していることを理解させた。その上で、火力、原子力、再生可能エネルギー（水力、その他）の発電方法の違いや長所・短所について説明した。 (2) 問題解決場面 「日本の理想的な電力構成はどのようなものだろうか」という課題を設定し、15年後の日本の理想的な電力構成を考えさせた。ここでは、先入観を与えないため、日本以外の地域（米、中、独、仏、伯）の例だけを示し、発電方法の違いや日本の地理的特色等から自分の意見を持たせた。その後、4人の小グループ内で意見交換を行わせ、多様な考え方に触れさせた。次に、グループ内でベストミックスを考えさせ、発表させた。 グループ内の話し合いの論点として「原子力発電をどうするか」「再生可能エネルギーにどの程度の可能性を見いだすべきか」「環境にどれくらい配慮すべきか」「十分な発電量をどう確保するか」などがあがった。 本時の課題については正解というものはないが、最後に1つの例として資源エネルギー庁による2030年度の電力構成を示した。その上で、こうした問題に向き合っていかなければならない日本の現状を伝えた。
4 ESDとの関連 (1) 構成概念 I 多様性…発電にはいろいろな方法があり、それぞれの長所を生かしながらいまよく組み合わせることで、よりよい電力構成が考えられていること。 III 有限性…エネルギー資源は有限であり、将来の発展のためには効率よく運用していく必要があること。 (2) 能力・態度 ①代替案の思考力 イ 他者の意見をふまえて自分の意見を建設的に述べることができる。 【教科等の力】 発電方法の違いや日本の地理的特徴を根拠として、よりよい電力のベストミックスを考える力。 (3) 教材の「つながり」 ①ESD関連分野 エネルギー ②教科 技術 ③題材 エネルギー変換のガイダンス（技術2年）

1 題材名 都市の繁栄と元禄文化
2 ねらい ・元禄文化がおこった背景について考察することで、江戸時代の社会について理解を深める。
3 学習活動 (1) 元禄文化の特徴について理解させる 都市の繁栄については前時で産業の発展と関連付けて学習した。本時では元禄時代の説明と元禄文化の特徴を理解する所から始めた。綱吉の文治政治を背景に、上方で新しい文化がおこったこと。文学作品や絵画の題材から当時の文化が町人を中心としたものであったことについてそれぞれ確認した。 (2) 問題解決場面 「なぜ上方で町人を担い手とする文化がおこったのか」という課題を設定し、既習事項に基づいて考察させた。ここでは浮世絵のような独特の風情を描く芸術作品がつけられた背景について、政治・経済・国際関係等から多面的に元禄文化を捉えさせた。 その際、トゥールミンモデルを用いて根拠となる事実と、それに対する解釈を分けるよう指導し、論理的な考察を促した。個人での考察の後、何が根拠となっているか、解釈が適切になされているか等についてグループで話し合う時間を設け、生徒同士の相互評価を行わせた。また、話し合いを通して様々な意見にふれさせることで、自分の考察以外の新しい面について気付かせる機会とした。 ここでは根拠として、幕府が鎖国を行い海外との接触を制限したこと、大阪や京都が都市として発展したこと、諸産業が発達して貨幣経済が浸透した結果町人が台頭したことがあがった。生徒はそこから鎖国により海外文化の影響が少なかったこと、大阪・京都の経済的な発展がそこでの文化を生み出したこと、町人の生活に精神的・経済的な余裕がでて文化の主体になったこと、などを理由として考えた。
4 ESDとの関連 (1) 構成概念 Ⅱ相互性…政治、経済、国際関係などが相互に作用しながら町人を中心とした江戸時代の文化を形成していたこと (2) 能力・態度 ③多面的・総合的に考える力 オ いろいろな側面やいろいろな人の立場からものごとをとらえることができる。 【教科等の力】 元禄文化がおこった理由について、既習事項を活かしながら、根拠に基づいて考える力。 (3) 教材の「つながり」 ①ESD関連分野 世界遺産・地域文化財 ②教科 美術 ③題材 鑑賞（美術2年）

1 題材名 江戸のエコ社会
2 ねらい ・江戸時代がリサイクル社会であった背景について考察することで、江戸時代の社会について理解を深める。
3 学習活動 (1) 現代と江戸時代の社会の違いについて理解させる 「エコ社会」という言葉の意味について共通理解を図り、その上で「エコ社会」を目指している現代社会のエコではない点について着目させた。生徒からは「多くのものを輸入し、大量生産・大量消費が行われている」「大規模な開発が行われている」などの意見が挙げられた。 次に江戸時代の暮らしについて説明し、当時の社会は現代社会とは大きく異なり、職業の細分化、リサイクル、少ない廃棄物といった特徴を持ち、循環型社会であったことを理解させた。 (2) 問題解決場面 「なぜ江戸時代は現在でいう「エコ社会」になっていたのだろうか」という課題を設定し、既習事項に基づいて考察させた。その際、根拠となる事実と、それに対する解釈を分けるよう指導し、論理的な考察を促した。個人での考察の後、何が根拠となっているか、解釈が適切になされているか等についてグループで話し合う時間を設け、生徒同士の相互評価を行わせた。 また、話し合いを通して様々な意見にふれさせることで、自分の考察以外の新しい面について気付かせる機会とした。 生徒からは、産業の面では技術が未発達なための大量生産の難しさ、経済の面では度重なる貨幣価値定価による物価高、国際関係の面では鎖国による原料・資源確保の限界などが理由としてあがった。また、化石燃料の利用技術の未発達や木材利用が中心であった点等を指摘する生徒もみられた。
4 ESDとの関連 (1) 構成概念 Ⅱ相互性…産業、経済、国際関係などが相互に作用しながら江戸時代の循環型社会を形成していたこと Ⅲ有限性…江戸時代は限られた資源を有効に活用するために、リサイクル活動がさかんに行われていたこと (2) 能力・態度 ③多面的、総合的に考える力 オ いろいろな側面やいろいろな人の立場からものごとをとらえることができる。 【教科等の力】 江戸時代が「エコ社会」となっていた理由について、根拠に基づいて考える力。 (3) 教材の「つながり」 ①ESD関連分野 環境 ②教科 国語 ③題材 「江戸からのメッセージ」(国語1年)

## 1 題材名 九州地方

## 2 ねらい

- ・九州地方の土砂災害の原因と対策について考察することで、九州地方の地域的特色について理解する。

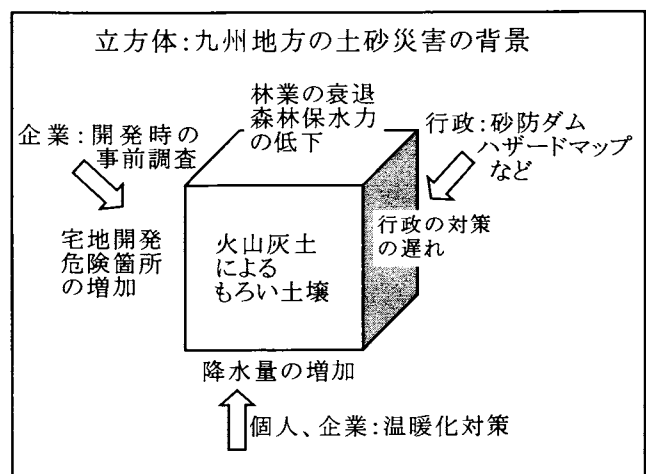
## 3 学習活動

## 問題解決場面

「九州地方で多発する土砂災害と人々の生活にはどのような関わりがみられるか」という課題を設定し、九州地方の土砂災害の原因と対策について考えさせた。特に原因に関する一般的共通性については複数の資料を用いて考察させることにした。その際、根拠となる事実と、それに対する解釈とを分けるよう指導し、論理的な考察を促した。また、個人での考察の後、何が根拠となっているか、解釈が適切になされているか等について話し合う時間を設け、生徒同士の相互評価を行わせた。

この課題では自然的条件として近年豪雨の回数が増加していること。社会的条件として宅地開発による災害危険箇所の増加や林業の衰退による森林の保水力低下、行政の対策の遅れがあげられる。こうした条件が互いに作用し合うことで土砂災害が発生しているということを理解させた。

また、さまざまな立場を意識させながら土砂災害への対策について考えさせた。



## 4 ESDとの関連

## (1) 構成概念

I 多様性…同じ日本国内でも地域によって自然、産業、文化等はそれぞれ異なり多種多様であること。

II 相互性…人々の生活はその地域の気候や地形といった自然条件や、それ以外の社会的条件が相互に関わり合っていること。

## (2) 能力・態度

## ③多面的・総合的に考える力

オ いろいろな側面やいろいろな人の立場からものごとをとらえることができる。

## 【教科等の力】

九州地方の土砂災害の原因を多面的に考察し、多角的にその対策について考える力。

## (3) 教材の「つながり」

①ESD関連分野 防災

②教科 保健体育、家庭

③題材 「自然災害への備えと避難」(保健体育2年)、「衣食住の工夫」(家庭2年)

1 題材名 伝統的な生活を守る人々の暮らし

2 ねらい

東北地方の伝統的な生活や文化について、自然環境や歴史的背景、地域の活性化など関連づけてとらえることができる。

3 学習活動

(1) 冬季の伝統的な郷土食を知る

秋田地方の郷土食である「いぶりがっこ」を知る。

冬の厳しい自然環境の中で、保存食として作られていることを想起する。

(2) 課題「東北三大祭りの特色を探ろう」

東北三大祭りについて確認する。

- ・ 秋田竿燈まつり
- ・ 青森ねぶた祭
- ・ 仙台七夕まつり

日	8月							
県	1日(月)	2日(火)	3日(水)	4日(木)	5日(金)	6日(土)	7日(日)	8日(月)
秋田県					秋田竿燈まつり			
青森県				青森ねぶた祭				
宮城県							仙台七夕まつり	

(3) 東北三大祭りの共通点を探る

- ・ 神への祈り
- ・ ねぶり流し

山形県				山形花笠まつり			
岩手県		盛岡さんさ踊り					
福島県				福島わらじまつり			

自然的条件からの考察

- ・ 厳しい自然条件の中での豊作への願い

社会的条件からの考察

- ・ 8月（旧暦の7月）の月上旬に集中
- ・ 観光客の誘致による地域活性化

	まつり	入込客数	開催期間
秋田県	秋田竿燈まつり	126万人	8月3日～8月6日
青森県	青森ねぶた祭	259万人	8月2日～8月7日
宮城県	仙台七夕まつり	204万人	8月6日～8月8日
山形県	山形花笠まつり	63万人	8月5日～8月7日
岩手県	盛岡さんさ踊り	136万人	8月1日～8月4日
福島県	福島わらじまつり	25万人	8月1日～8月2日

(4) まとめ

東北三大祭りを通して、東北地方の伝統的な生活・文化について自然的条件、社会的条件を関連づけてまとめる。

4 ESDとの関連

(1) 構成概念

I 多様性・II 相互性

伝統的な生活・文化は、それぞれの地域に根ざした多様なものであるとともに、相互に関わり合ったものであること。

(2) 能力・態度

③ 多面的・総合的に考える力

オ いろいろな側面やいろいろな人の立場からものごとをとらえることができる。

【教科等の力】

東北地方における伝統的な生活や文化について、気候や地形など自然環境や歴史的背景、現代における地域活性化などと関連づけて、多面的・多角的に考察する力

(3) 教材の「つながり」

- ① ESD関連分野 伝統文化
- ② 教科 家庭科「郷土の食を考えよう」

1 題材名 戦争の終結
2 ねらい 第二次世界大戦後の世の中について考えることで、当時の国際関係や戦争の影響について理解を深める。
3 学習活動 (1) 学習課題を確認する。 第二次世界大戦が終わった後の世界について、「各国の政府や民衆は新しい時代に何を望んだだろうか」という課題を設定した。これまでの既習の知識を活用して日、米、ソ、英・仏、アジア諸国等の政府や民衆の立場から、多面的（経済や産業、安全保障、外交等）に考察させることを考えた。 (2) 問題解決場面 授業の始めに生徒にそれぞれ立場（国）を割り振り、その立場から考察させた。その後、同じ立場同士で意見交換を行わせた。次に複数の立場の担当者が集まるグループを作らせ、意見交換と他の立場に対する質疑応答等の時間とした。また自分と異なる立場の考察はメモをとらせた。最後にそれぞれの意見を発表させた。 本時では生徒に異なる立場からの考察に触れさせることで、より多面的・多角的に社会的事象（第二次世界大戦直後の世界）を捉えさせようと考えた。そこで、意見の共有を重視し、以下の点について留意した。 ①意見の共有を行う場面の設定 A同じ立場でつくるグループ、B異なる立場でつくるグループ、C学級全体といった3つの場面を設定した。Aは自分の考察をより深めさせること、B・Cは他の立場の意見を聞くことでより多角的に事象を捉えさせることを目的としている。 ②思考の可視化 意見の共有を円滑に行うため、トゥールミンモデルの形式に沿ったワークシートを用意し、思考の可視化を図った。
4 ESDとの関連 (1) 構成概念 I 多様性…戦後の諸国の状況は様々であり、それぞれの立場の違いによって求める社会の在り方がことなること。 II 相互性…様々な国の特徴を構成する要素である経済や安全保障、外交などはそれぞれが相互に関わっていること。 (2) 能力・態度 ③多面的、総合的に考える力 オ いろいろな側面やいろいろな人の立場からものごとをとらえることができる。 【教科等の力】 様々な国の政府や民衆の立場から、戦後社会に何を望むかを多面的・多角的に考察する力。 (3) 教材の「つながり」 ①ESD関連分野 平和 ②教科等 英語 ③題材 Faithful Elephants



1	題材名 伝統文化の継承と創造 ～伝統文化を保存・継承する意味や意義とは～
2	ねらい 能が継承されてきた理由について考えることで、伝統文化を保存・継承する意味や意義について理解する。
3	学習活動 (1) 伝統文化について理解させる 知っている伝統文化を発表させ、日本には様々な伝統文化が存在することを確認した。市内中学生を対象とした観能教室が近いことから、伝統文化のなかでも能を中心に取りあげることにした。 (2) 問題解決場面 「伝統文化（能）はどのように継承されてきたのか？」という課題を設定し、以下のような流れで考察を進めた。 ①能に関する知識を、資料や他教科（国語，音楽）での既習事項を含めて確認する。 総合芸術であること（謡，舞，劇，面，囃子）， 室町時代に成立したこと（観阿弥・世阿弥父子により大成，足利義満の保護を受ける） 散楽，田楽や猿楽をもとにしていること 能楽師と流派（家元制）があること 演目は約250曲あり，演目は5種類に分けられること 世界無形文化遺産としてわが国の第一号として指定されたこと など ②能を現代に継承するためにどのような人々が関わってきたのかを考えさせる。 ③様々な立場の人々が能を継承しようとしてきた理由について考えさせる。 能の継承の理由については，能の持つ価値をどう捉えるかが重要であるが，生徒からは「能が昔の日本人の考え方や感情を引き継いでいること」，「日本の地理的特徴や歴史的特徴による能の独自性」「職業としての能の必要性」等からの意見があがった。 また，発表後に能の各演目の出典やテーマ，後見の役割などから，古典を継承していることや亡者・弱者への供養の心がこめられていることなどを確認した。
4	ESDとの関連 (1) 構成概念 I 多様性…伝統文化のひとつである「能」は総合芸術として捉えることができ，多種多様なものごとから成り立っているものとして継承されていること (2) 能力・態度 ③多面的，総合的に考える力 オ いろいろな側面やいろいろな人の立場からものごとをとらえることができる。 【教科等の力】 伝統文化継承の意義について，能の歴史や演目の特徴，芸術性等から多面的・多角的に考察する力 (3) 教材の「つながり」 ①ESD関連分野 世界遺産・地域文化財 ②教科 音楽，国語 ③題材 能の魅力を探ろう（音楽），能「羽衣」をよみ，能について考えよう（国語）

<p>1 題材名 効率と公正 ～学校のトラブルについて考えてみよう～</p> <p>2 ねらい 限られた資源を有効に活用するためにはどうしたらよいかを、批判的に考えることができる。</p> <p>3 学習活動</p> <p>(1) 学習課題を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校でのトラブルについて、資料から内容と原因を読み取る。 トラブルの内容は、3つの部活動（ソフトボール部、サッカー部、陸上部）の代表者がグラウンドの使用割りをめぐり対立していること。トラブルの原因は、校舎の耐震化工事のためグラウンドの一部が使用できなくなっていることと、地区大会3日前でどの部もグラウンド全面を使用した練習がしたいという要望があること。</li> <li>・学習課題を知る。 3つの部活動が納得して練習できるグラウンドの使用割りを考えよう。</li> </ul> <p>(2) 学習課題について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・対立を解決するため（合意形成を図るため）に必要な考え方である「効率」と「公正」の意味をそれぞれ理解する。</li> <li>・ワークシートを用いて、「効率」と「公正」の考え方に基づいて各自で解決策を考える。</li> <li>・各自の解決策に問題点がないか考える。</li> <li>・解決策を発表する。その際、ワークシートを教材提示装置でスクリーンに拡大表示する。</li> <li>・それぞれの解決策の問題点を指摘し合う。</li> </ul> <p>(3) 学習課題についてまとめる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・それぞれの解決策の問題点を改善する方法（修正案）を考える。</li> <li>・問題点を改善する意見を付け加えた上で、最もすぐれた解決策（修正案）を、クラス全員で決定する。</li> <li>・実際の学校生活の中で、似たようなトラブルがないか考え、発表する。</li> </ul> <p>4 ESDとの関連</p> <p>(1) 構成概念</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Ⅱ相互性…グラウンドで3つの部活動が練習するには、使用割りが必要なこと。</li> <li>Ⅲ有限性…耐震化工事のため、使用できるグラウンドの面積が通常の半分であること。</li> <li>Ⅳ公平性…3つの部活動とも機会や結果について平等に扱うべきであること。</li> <li>Ⅴ連携性…3つの部活動が互いに連携・協力することで、安心して練習に取り組めること。</li> </ul> <p>(2) 能力・態度</p> <p>① 代替案の思考力</p> <p>イ 他者の意見をふまえて自分の意見を建設的に述べることができる。</p> <p>【教科等の力】</p> <p>効率と公正の考え方に基づき、問題に対して当事者同士が納得する解決策を考える力。</p> <p>(3) 教材の「つながり」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① ESD関連分野 その他（見方、考え方）</li> <li>②教科 全教科</li> <li>③題材 対立が生じている社会的事象を取り扱う題材や単元</li> </ul>
--

<p>1 題材名 持続可能な金沢市をめざして</p> <p>2 ねらい 持続可能な金沢市に向けた課題について多面的・多角的に市政を捉えながら、金沢市におけるよりよい地方自治の在り方について関心が高まっている。</p> <p>3 学習活動 (1) 前時の活動。 地方自治に関する既習の知識や資料を基にして、企業、高齢者、子育て世帯、観光客のいずれかの立場から、金沢市の課題とその解決方法について考察させた。その際、ツールミンモデルを用いて、根拠を明確にするよう指導した。</p> <p>(2) 本時の問題解決場面 課題「持続可能な金沢市に向けて、どのような政治が求められるだろうか」</p> <p>①同じ立場同士で意見交換 前時でまとめた意見について、同じ立場で考えた者同士で意見交換を行った。また、分からない点を相談する時間とした。</p> <p>②異なる立場同士で意見の共有 4つの立場がそろそろように小グループをつくらせ、自分の立場以外からの意見についてワークシートにまとめさせた。</p> <p>③金沢市の立場から優先すべき課題を一つ選び、その理由をまとめる 様々な立場から出てきた課題のなかで、特に優先すべき課題を選ばせた。その際、他の課題との関連や、その課題が解決されることでどのような変化をもたされるかを意識させた。 (例) 「伝統工芸の振興」を選んだ場合 伝統工芸の振興→観光客増加 →企業発展 →市税増加 →教育の充実 →雇用増加 →生産年齢人口増加</p> <p>④具体的な政策の決定 グループで選んだ課題に対して、それを解決するための具体的な政策を考えさせた。</p> <p>4 ESDとの関連 (1) 構成概念 I 多様性…金沢市には多様な立場の人々が見られるようになり、金沢市政に望むことはそれぞれ異なること。 II 相互性…伝統文化や街並みの保存、財源の確保、行政サービス等はそれぞれが互いに関連していること。 III 有限性…伝統文化や街並みの保存、財源の確保、行政サービス等は永続的なものではなく、有限であること。</p> <p>(2) 能力・態度 ③多面的、総合的に考える力 オ いろいろな側面やいろいろな人の立場からものごとをとらえることができる。 【教科等の力】 様々な立場から、望ましい金沢市政について多面的・多角的に考察する力。</p> <p>(3) 教材の「つながり」 ①ESD関連分野 その他 ②教科等 総合的な学習の時間 ③題材 金沢調べ</p>
--

1	題材名 資源・エネルギー問題
2	ねらい 資源・エネルギーの需給をめぐる現状と課題をふまえ、今後のエネルギー政策に必要とされる考え方を持つことができる。
3	学習活動 (1) 学習課題を確認する。 ・国民、企業、電力会社、それぞれの立場から、望ましい電源構成をツールミンモデルを用いたワークシートにまとめてくる。(宿題) ・学習課題「15年後の日本の「電源構成のベストミックス」を考えよう。」 (2) 学習課題について考える。 ・4人グループ内で、あらかじめ設定した立場からそれぞれ意見を発表する。 (立場) 国民2名、企業1名、電力会社1名 ・グループの4人とも政府の立場から電源構成のベストミックスについて考え、政府としての意見をまとめる。その際、3つの立場の意見等をふまえて電源構成を考えさせる。 ・グループ(全10グループ)ごとに意見を発表する。他のグループの意見を聞き取る。 (3) 学習課題についてまとめる ・15年後の日本社会にふさわしい「電源構成のベストミックス」について自分の考えを有権者の立場からワークシートにまとめ、数名が発表する。 本時では、各自の立場と諸資料にもとづいて予想した15年後の日本の電力構成を他者と共有し、それらの立場の意見をふまえて政府としての電力構成を考える。そのことを通して「未来像を予測し計画を立てる力」を養う。社会科の授業で身に付けさせる思考力に、「社会的事象の意味や意義を解釈する力」がある。本時では、日本のエネルギー政策(電力構成)を、様々な立場から多面的に捉えさせ、その意味や意義を解釈させる。 言語活動として「発表(説明)」を行うが、その際、ツールミンモデルを取り入れたワークシートを用いることで根拠を明確にした考察を促す。また、それらをスクリーンに映し出して可視化することで、生徒に思考の過程を共有させる。
4	ESDとの関連 (1) 構成概念 I 多様性…発電方法にはいろいろなものがあり、それぞれの長所と短所を考えながら組み合わせることで、様々な電力構成が存在すること。 III 有限性…エネルギー資源は有限であり、将来の発展のために効率よく利用する必要がある。 (2) 能力・態度 ②未来像を予測して計画を立てる力 ウ 過去や現在の情報に基づいて、未来を予想・予測することができる。 【教科等の力】 将来の日本に適した電源構成のベストミックスについて、社会の変化や資源の有限性、発電方法の特徴などから考察する力。 (3) 教材の「つながり」 ①ESD関連分野 エネルギー ②教科等 英語、理科 ③題材 Clean Energy Sources (英語)、いろいろなエネルギーと移り変わり(理科)